

用語の解説

環境リスク

人の活動によって環境に加えられる負荷が環境中の経路を通じ、環境の保全上の支障を生じさせるおそれをいい、人の健康や生態系に影響を及ぼす可能性（おそれ）を示す概念です。（4頁参照）

リスク管理

米国大統領・議会諮問委員会（1997）で定義されているリスク管理は以下の通りです。「リスク管理は人間の健康や生態系へのリスクを減らすために、必要な措置を確認し、評価し、選択し、実施に移すプロセスである。リスク管理の目標は、社会、文化、倫理、政治、法律について考慮しながら、リスクを減らしたり、未然に防止するための科学的に妥当で費用対効果の優れた一連の行動を実施することである。」

同委員会報告では、「我々のリスク管理の定義は、複数の代替可能な規制措置を評価し、その中から選択するプロセスに限定されてきたこれまでの定義より広い」とあるように、リスク管理を個別の化学物質対策と捉える狭い定義のしかたもあります。その場合、リスク管理とリスク評価の関係は、リスク管理の中にリスク評価があるという包含関係ではなく、リスク評価を行った後、リスク管理を行うという並列の関係になります。

リスク評価

化学物質の環境リスク評価は、リスク管理の中ではリスク分析に位置付けられます。化学物質の環境リスク評価は、評価対象とする化学物質の人の健康及び生態系に対する有害性を特定し、用量（濃度）－反応（影響）関係を整理する（有害性評価）とともに、人及び生態系に対する化学物質の環境経由の暴露量を見積もり（暴露評価）、両者の結果を比較することによってリスクの程度を判定するものです。これらには、まず多数の化学物質の中からスクリーニングするための「初期評価」と、次の段階で化学物質の有害性及び暴露に関する知見を充実させて評価を行い、環境リスクの管理方策などを検討するための「詳細評価」があります。（4～7頁参照）

リスクコミュニケーション: Risk Communication

化学物質による環境リスクに関する正確な情報を市民、産業、行政等のすべての者が共有しつつ、相互に意思疎通を図ることです。

インタープリター: Interpreter

リスクコミュニケーションにおいて必要な人材であり、中立的立場で理解しにくい情報を分かり易く説明する人のことです。

ファシリテーター: Facilitator

リスクコミュニケーションにおいて必要な人材であり、中立的な立場から議論を整理する司会の役割をする人のことです。ファシリテーターは議論の内容には関与しないことに注意が必要です。

有害性(ハザード): Hazard

化学物質のもつ物性(融点や密度)とともに固有の性質の一つで、有害さの程度を示します。化学物質の有害性は、症状が現れるまでの時間によって急性毒性と慢性毒性に分けられます。その他の有害性としては発がん性、変異原性、生殖毒性、催奇形性、感作性があります。多くの有害性は、動物実験で得られた結果を人に当てはめるため、不確実性を伴います。

急性毒性とは、化学物質を1回投与するか短時間暴露してからだいたい数日以内に発症または死に至る毒性を指します。慢性毒性とは、化学物質を繰り返し投与するか長期間暴露したとき数カ月以上してから発症または死に至る毒性を指します。

分解性、蓄積性

化学物質は自然環境中で酸化したり、分解されたりするため、自然環境中での化学物質の寿命は数秒から数十年と様々です。分解されにくいものは「難分解性」であるといい、微生物に分解されやすいものは「生分解性がよい」といいます。

また、化学物質は水によく溶けるものと、油によく溶けるものとに分類されます。例えばダイオキシン類は水にほとんど溶けず油によく溶けるので、体内に取り込まれると脂肪にたまります。この性質を「蓄積性」といい、一般に水に溶けにくく油に溶けやすいものは体内の脂肪に蓄積しやすく、逆に水に溶けやすいものは体外に排出されやすい傾向が見られます。